

日本口腔衛生学会出席レポート

医歯学系・准教授
(口腔衛生支援学講座) 八木 稔

来春には、口腔生命福祉学科第1期生が卒業します。まさに最初の卒業生が世に出ることになるわけですが、卒業後は自分自身で積極的に学術情報を求め研究に関する興味を高めていく自己教育がより必要となってきます。そうした学術情報と研究が一体となって展開される場のひとつとして「学会」が存在するといえます。

このレポートは、口腔生命福祉学科の最初の卒業生が出ることになるため、関係する学会のひとつである「日本口腔衛生学会」を紹介し、卒業後の自己教育の一助になることを目的としています。

概括的な紹介は、別の資料¹⁾に譲るとしまして、私は2006年度に大阪で開催された「第55回日本口腔衛生学会・総会(栗石聡学会長)」に出席した折のことがらを、その講演集²⁾に沿って報告し、そのことによって同学会の特徴を述べたいとおもいます。

このたびの総会は、メインテーマが「口腔保健の Evidence-based Medicine を再考する」であり、Evidence-based Medicine (EBM: 根拠に基づく医療) が最良の根拠を求めするための医療ではなく、最良の結果を得るための医療であることを確認し、いま一度EBMを考え直してみようという企画でした。このメインテーマに応じて、「ライフスタイル医学研究の展望: 平均値から個体差の医学へ」、「EBM と医療統計」、「エビデンスに基づいた禁煙治療の方法と実際」などの講演が提供されました。いずれも口腔衛生に含まれる疫学と統計に関する事項と密接な係わりがあり、EBM から EBHC (Evidence-based Health Care: 根拠に基づくヘルスケア) へと発展していく方法論を含んでいます。ヘルスケアは、おそらく口腔生命福祉学科の卒業生にとって(もちろん歯学科の卒業生にとっても)最も重要なタスクのひとつであるといえるでしょう。



日本口腔衛生学会では、いわゆるフィールド研究と呼ばれるものが多く発表されていますが、その一方で、基礎的な研究あるいは個人衛生・臨床予防に関する研究も多く発表されています。また、日本口腔衛生学会は、行政に所属した歯科医師や歯科衛生士が多く集まる学会であるという特徴があり、そうした方々も積極的に研究発表を行っています。

こうした研究発表には適切な発表形式が求められます。研究発表とは学会発表にとどまらず論文を書くことなども含まれるのですが、いずれにせよ研究発表もまた研究の一部であるといえます。歯科衛生士の中には、研究あるいは研究発表に関心を持ちながら、そのやり方に困難あるいは限界を覚えている方々が少なからず存在するようです。そうした歯科衛生士をサポートするために、日本口腔衛生学会の「歯科衛生士委員会」は「歯科衛生士研究活動支援事業」を行っています。2006年度の総会では、「歯科衛生士の研究活動の推進を考える I」をテーマに自由集會が開催されました。

日本口腔衛生学会は、文字通り「口腔衛生」の専門学会ですが、従来から社会歯科学の領域が重視されてきました。社会歯科学に関与する福祉の課題も今後さらに重要なテーマとなっていくことでしょう。日本口腔衛生学会には、このたびの卒

業生のように歯科衛生的のみならず社会福祉的な視点をもった方々の参加が期待されています。

ぜひ多くの方が日本口腔衛生学会に参加されますよう、同学会評議員のひとりとしてご紹介申し上げます。

参考

- 1) 中垣晴男（日本口腔衛生学会理事長）：日本口腔衛生学会、日本歯科医学会誌26巻100頁（2007年）
- 2) 日本口腔衛生学会発行：講演集 第55回日本口腔衛生学会・総会、口腔衛生学会雑誌第56巻第4号（2006年）



日本社会福祉学会 出席レポート

医歯学系・准教授 隅田好美
(福祉援助学講座)

日本社会福祉学会は、社会福祉に関連するあらゆる分野の人が入会しており、2007年度の会員名簿では、5,000名以上が登録されています。

日本社会福祉学会第54回全国大会が、2006年10月7日(土)、8日(日)に立教大学新座キャンパスで行われました。第54回大会の参加者の人数はまだ発表されていませんが、第52回大会(東京:東洋大学)の参加者は1,855名、第53回大会(仙台:東北福祉大学)は1,576名でした。今回は埼玉県という全国から参加しやすい場所で開催されたため、多くの方が参加されていました。わたしは医療保健・医療福祉の分野で「患者・家族・支援者における〈認識のズレ〉と〈認識の一致〉—ALS患者の病いの意味づけのプロセスより—」という演題で発表してきました。

今回の大会のテーマは「新しい価値の創造と社会福祉の役割」でした。大会の初日にはこのテーマで、聖路加国際病院の日野原重明氏による記念講演が行われ、続いて日野原氏と左手のピアニスト舘野泉氏による対談が行われました。舘野氏はピアニストとして世界的に活躍されていましたが、2002年脳溢血より右半身不随となり、2004年左手の演奏で復帰されました。対談の後、舘野氏による左手だけのピアノコンサートが行われました。片手で演奏しているとは思えない、とてもすばらしい演奏でした。

その他に2日間で、大会企画シンポジウムが3つと、国際シンポジウムとして日韓社会福祉学会学術交流シンポジウムが行われました。口頭発表は18会場で350演題、ポスター発表は30演題ありました。発表の分野は理論、歴史、思想、制度・政策、方法・技術、児童福祉、家族福祉・司法福祉・更生保護、障害児(者)福祉(身体障害者・知的障害者・精神保健福祉関係)、高齢者保健福祉、女性福祉・ジェンダー、地域福祉・NPO・ボランティ



ア、国際社会福祉、所得保障・公的扶助、医療保健・医療福祉、社会福祉教育・実習に別れ、発表者が多い分野では、同時間に2~3つの会場で発表が行われていました。また、大会が企画したシンポジウム以外に、12の自主企画シンポジウム(180分)が行われていました。各分野の第一線で活躍されている人たちが、自主的に企画したシンポジウムです。

発表時間は長く、口頭発表では発表20分、質疑応答5分、ポスター発表では発表15分、質疑応答等5分でした。20分あるとしっかりと自分の考えや研究について伝えることができ、聞いている方も満足します。しかし、口頭発表やシンポジウムなど、同じ時間に聞きたい内容が重なることが多く、いつも困っています。

社会福祉学会では「介護方法」に関する発表は少ないのですが、わたしが参加してから、歯科に関係する口頭発表等の演題を見た記憶がありません。唯一記憶に残っているのは、第53回の大会企画シンポジウム「社会福祉と感性—21世紀型福祉の探求」でした。シンポジストのひとりが「生命科学的背景から考える『社会福祉と感性』」という演題で、知的障害者のストレスと唾液コルチゾール値に関する研究から、唾液コルチゾール値を指標として「感性」をさぐるという発表をされました。その時に、口腔ケアの意義についても少

し触れられていました。

というわたしも、「日本在宅ケア学会」や「死の臨床研究会」では、筋萎縮性側索硬化症（ALS）患者や癌終末期患者の口腔ケアに関する問題点について発表したことがあります。日本社会福祉

学会では歯科に関連した発表を行ったことはありません。今後、口腔生命福祉学科の卒業生が社会福祉の分野で活躍し始めたら、是非、歯科と福祉に関連した研究を行い、日本社会福祉学会でもどんどん発表してほしいと思います。

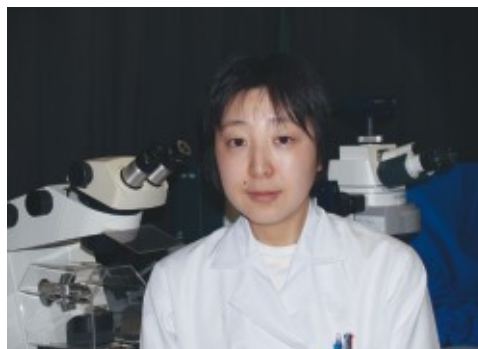


IADR Pan-European Federation Conferenceに参加して

日本学術振興会特別研究員 鈴木 晶子
(口腔解剖学分野)

昨年9月中旬にアイルランド ダブリンで開催された、IADR Pan-European Federation Conference (国際歯科医学会 ヨーロッパ支部学術大会、PEF)で発表する機会を得ることが出来ました。ちょうど1月前にイギリスのヒースロー空港で爆弾テロ未遂事件があり、空港や街の警備はかなり厳重で物々しい雰囲気でしたが、観光シーズンと重なったこともあって世界中から多くの観光客が集まっていました。会場となったトリニティー大学のあるダブリン中心部は中世ヨーロッパの街並みが保存され、観光名所となっている教会や城、銀行などの建築物のなかには今もそのまま使われている物も多くありました。トリニティー大学もその1つで、校舎や庭園、世界的に有名な図書館など学会の合間に見学することができました。アイルランドはギネスビールとアイリッシュウィスキーで有名ですが、テンプル・バー地区や大通り沿いに立ち並ぶパブとカフェは、うわさ通りのにぎわいを見せていました。

学会は、世界中の歯科研究者が一同に集まるIADR総会と比較すると小規模ですが、基礎から臨床研究まで幅広いテーマのシンポジウムが開催されていました。中でもインプラントはドイツのプローネマルク研究所を中心としたグループで、予防歯科や歯の発生に関してはフィンランドで古くから研究されており、歯科医学の発展がヨーロッパを中心に始まって今も変わらず拠点となっていることを改めて実感しました。私は「Process of Articular Cavity Formation in the rat TMJ (ラット顎関節における関節腔形成過程について)」という題名でポスター発表を行いました。このテーマは大学院時代から続けて取り組んでいる研究で、顎関節における関節腔形成では上下で形成に関与する細胞、形成機構そのものが異なっているのではないかという仮説に基づき免疫組織化学的、電子顕微鏡による微細構造学



的手法を用いて進めています。背景として、四肢関節と顎関節では生じる疾患の種類や重症度が大きく異なり、その理由の1つに顎関節では関節腔が上下に分断されていることや関節円板の形成があると推測されます。この特徴の意義を検索することで疾患の解明に近づけると考えています。

PEFに参加して、他分野の多くの研究者からの質問や意見を聞いたことは、自分の研究内容を再考する良いきっかけとなりました。異なる見方や考え方を聞き、議論することで、偏りがちな自分の考えを原点に引き戻し、モチベーションを上げることが出来ました。また最先端の研究者のシンポジウムを聞くことにより、歯科分野のレベルの高さを認識できました。そして、アジア特に中国や東南アジアからの留学生・ポスドクが大勢参加していたことは、ライバルとなる若い研究者が、海外進出を視野に入れたこれほどまで高いモチベーションを持っているのかということに気づかされ、大変貴重な時間を過ごすことが出来ました。

最後に、私がPEFでの発表に至るまでにたくさんの方々にご協力いただき、応援していただいたことを付け加えたいと思います。特に、参加する機会をくださった前田教授、研究の直接の指導をくださった井上准教授をはじめ、実験を手伝って頂いたスタッフや院生に感謝の意を表します。

2007年 IADR (New Orleans) に参加して

医歯学総合病院・医員 島田靖子
(歯周病診療室)

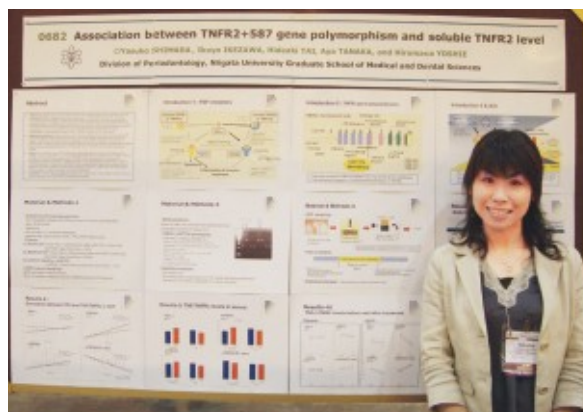
今回、ニューオリンズで開催された IADR (国際歯科研究会) に参加、発表させていただく機会をいただきましたのでここに報告させていただきます。私は卒後 8 年目で、大学院を卒業し歯周科の医員として採用されて 4 年目になります。この間に、今回を含め 4 回の IADR (サンディエゴ、ハワイ、ブリスベン、ニューオリンズ) に参加、発表させていただく機会に恵まれました。初回のサンディエゴには緊張と心配のあまり、英和辞典に和英辞典、普段決して読まない大量の論文を持参し、全く役に立たなかったことが思い出されます。4 回目となると多少は余裕? も出てきたかと思えます。

さて、「ニューオリンズ」と言えば「水害」を連想される方も多いと思います。実際、甚大なる被害があったのかと思います。行くまでは、水害に便乗した泥棒やギャング(?) がたくさんいて危険な街なのではないかと心配しておりました。しかし、その爪あとはほとんどなく、その姿はまさに「アメリカ三大観光地」でありました。アメリカ南部の奴隷制度が盛んであったころの街並みが美しく保存され、ミシシッピ川の雄大な流れを間近に見ることができました。

今回の学会においては、TNF 受容体 2 型遺伝子多型が歯周炎患者の血清ならびに歯肉溝滲出液に及ぼす影響について報告しました。日本の遺伝

子多型といえば新潟大学(ちょっと言い過ぎ)、私は大学院時代に TNF 受容体 2 型遺伝子多型が慢性歯周炎の重症化に影響する可能性を報告しました。今回はさらにこの TNF 受容体 2 型遺伝子多型が実際に歯周炎の患者様の生体内でどのような影響を及ぼしているのかについて検討しました。遺伝子多型とは、遺伝病を引き起こすことはないがヒトの体質を決めるであろうわずかな遺伝子の違い、とご理解いただければと思います。この遺伝子多型は人種によって頻度がさまざまであることも知られています。国際学会において発表することは、他人種の研究者とこの点においてディスカッションできるという点で本当に役立ちます。また、今回は山崎教授のご配慮により、とても有名な先生方とお食事をさせていただくという機会にも恵まれました。とても緊張しましたが、いろいろなお話を聞かせていただいたり、自己紹介をするチャンスがあったり(当然英語!!)、研究者の世界を目の当たりにすることができとてもワクワクしました。

順調に発表も終わり、帰国の途に向かう私達にも最後にアクシデントが待ち受けておりました。帰りのアメリカ国内移動の飛行機が搭乗直前にキャンセル……! 悪いことはさらに重なり、次のフライトは山崎教授(今回は女子校の修学旅行の引率の先生状態。すみません。)とは別の便、し



かもキャンセル待ちになることに。それまで、のほほんとして山崎教授の後ろをついてきた私たち5人。今度はつたない英語で5人分のチケットを死ぬ気で確保することになりました。私は飛行機会社のあまりの対応の悪さに、空港のカウンターで無意識に“くそばあ！”と言っていたと後輩に指摘されました。ま、日本語は通じないのでよしとしましょう。この時は学会会場よりも英語の重

要性を痛感することになりました。今となっては本当に良い思い出です。

国際学会に参加する、というのは学術的な面ではもちろんのこと、英語の重要性や国際社会の常識においても学ぶことのできるとても良い経験だと思います。最後になりますが、このような好機を与えてくださった吉江弘正教授に心より感謝の意を表します。

